2022年11月6日 召天者記念礼拝（降誕前 第7主日礼拝）

メッセージ「天国のことは天国で」　　水谷憲牧師

聖書 ルカによる福音書 20章27-40節

「韓国のクリスチャンはよく祈り、台湾のクリスチャンはよく賛美し、日本のクリスチャンはよく議論をする」と言われるそうです。日本のキリスト教徒は頭でっかちで情熱が足りない、といった皮肉を込めた表現なのかもしれません。しかし、ドイツ在住のある方のお話によれば、ドイツのクリスチャンたちもよく議論をするのだそうです。聖書研究会などで、ある聖句を中心に、そこに参加した一人一人が自分の信仰を振り返りながら、その御言葉から与えられた自分へのメッセージを言葉にし、他の人の呈する疑問に自分なりに答えてみる。一人一人がその作業に真剣に取り組んでいる。1 時間ほどの話し合いの中で、牧師が口を挟む隙はほとんどなく、日本と似ているなあ、と感じたそうで、そんなドイツのクリスチャンの姿と日本の私たちの姿が似ているという話を知って、私もちょっと安心したものでありました。

しかし、そうは言っても、私たちは自分の信仰や聖書の読み方、あるいはそこから受け取った自分なりのメッセージなどを人前で語ることが得意ではない、といった印象もまだあります。ここでいう議論というのは、自分の意見を押し通し、人を打ち負かす議論、今、流行りの「はい、論破しました」といったディベートのような議論などではなく、聖書の語りかけるメッセージは人それぞれ違って当たり前なのだということを踏まえた上で、自分の与えられたメッセージを語り、他者の語る言葉に新たな気付きを与えられ、聖書が語っていないために正解の出ることのない疑問について一緒になって悩みつつ考える、といったものです。そのように、聖書の御言葉に真剣に向き合い、自分の表も裏もさらけ出しつつ、そこから何が語られているのか皆で一緒になって考えるという場は、必ずしも結論が出なかたとしても、とても豊かな実りのある場であると言えます。

しかし、時には、それが不毛な議論の場になったりすることもあります。話のテーマが私たちの存在とは全く関係もない、信仰が問われるわけでもない、揺さぶられたりすることもないようなものとなってしまう時も、あるかもしれません。例えば、私が神学生の頃になりますが、神学部でイエス・キリストの時代の便所について調べようとしていた人がいました。私も大した勉強していないので偉そうなことは

言えませんが、しかしイエスの時代の便所のことなんて、いくら聖書を読んでも出てきませんし、果たしてそれを調べて何の意味があるのか、どうしたかったのかも、分かりませんでした。そのように、意味があるのかないのか分かりかねる、不毛な議論に陥ってしまう人は、聖書にもしばしば出てきます。それが、福音書に出てくるファリサイ派の人々や今日のサドカイ派の人々でした。

今日のこの議論の中心は「復活」についてです。確かに「死」とか「死後の世界」「私たちは死んだらどこへ行き、どうなるのか」についての謎は、私たちの大きな関心事であるとともに、大変重要なテーマです。ファリサイ派の人々は復活を信じていました。しかし、彼らはその謎を解明しようとして、死んだ人は復活した時に服を着ているのか、裸で復活するのか、服を着ているなら、その服は死んだ時の物か、あるいは全く新しい物か、復活した時には体の欠陥はそのままなのか、どこで復活するのか、などなどというところまで議論していたといいます。「気になるのそこなん？」という不思議な気もしますが、まあそれも復活を確信していたからこそだったのでしょう。

それに対してサドカイ派の人々は、復活を全面的に否定していました。というのも、彼らはファリサイ派とは違って、口伝えの律法や慣習を重要視しておらず、聖書の中で守らなければならないのは「モーセ五書」、つまり「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の５つだけだとして、詩編や預言書も聖書として認めていなかったというのです。彼らにとってはモーセの律法のみが絶対のものでしたから、モーセが復活について何も言っていないということは、復活などありえないんだという結論に至っているわけです。そして彼らはそのモーセの律法を引用してイエスに質問をしました。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです」 サドカイ派の人々のねらいとしては、復活が本当にあるのであれば、こんな答えにくい、ややこしいケースでもきちんと納得のいく答えが出せるだろう、まあ復活なんてないのだから、答えられなくても仕方ないさと。これは確かに、私たちも気になるところではあるように思います。

「マタイによる福音書」と「マルコによる福音書」の同じ話の箇所には、その質問を受けてイエスはまずこう言っています。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか」 律法に精通しているはずのサドカイ派の人々に対して、イエスは「あなたたちは聖書を知らない」「神の力を知らない」と言ってのけるのです。イエス・キリストに言わせると、そのようなサドカイ派の質問も、「復活したら何を着ているだろうか」というようなファリサイ派の議論も、ユダヤの便所について研究することと大差ないのです。なぜならそれは言うまでもなくほんの瑣末な事柄でしかなく、私たちが神を見上げ、神により頼みつつ、与えられたいのちを生きるという信仰の本筋とは離れたことだからです。

そもそも、私たちがこの世における常識を新しいいのちの出発点である次の世、つまり天の国に持ち込むことこそがイエスの言うように大きな思い違いなのかもしれません。復活するとは、死んだ体が再び息を吹き返すことではない。天の国ではこの世の生活の延長を永遠に生きるということでもない。パウロも言っていますが、私たちは地上の歩みを終えた後には、「霊の体」で天の国へと招かれるのです。私たちは天使と等しい体となり、もはや死ぬこともなく、あらゆる痛みも悲しみも苦しみも味わわなくてすむのです。そこには地上での生活とは異なる生活があります。「めとることも嫁ぐこともない」とイエスの言うように、私たちの知る結婚生活や家族としての生活ではない、私たちの想像を超えた関係性による天国生活なのでしょう。

そう考えると、確かに少々さみしい。しかし確実なのは、私たちがいつかこの世の歩みを終えて、神様のみもとに召され、天の国へ招かれた時、私たちは先に召されていた愛する一人一人、父や母や、夫や妻、息子や娘、兄弟姉妹や友人たちと再び笑顔で会うことが必ずできるということなのです。神様は私たちに対して決して悪いようにはなさらない。私たちが天国でみんなと再会する時、私たちは一体どのような姿でいるのかも分からない。父母の前では幼子の姿になり、夫の前では妻、妻の前では夫、子どもたちの前では父や母、学生時代の友人の前では学生自分の姿に、その都度なっているのかもしれませんし、あるいはそのような人間関係の枠はすっかり取り払われ、全くの愛のみによって再会を喜んでいるのかもしれません。いずれにせよ神様によって天国で私たちは、もう地上では会えなくなってしまっていた大切な人と必ず再会し、永遠の時をお互いに慈しみあいながら歩んでいくことが約束されているのです。

ですから、今この世を生きる私たちは、復活した後、天国へ行った後のことを心配するよりもむしろ、今のこの地上での歩みをどう進めて行くか、死者の中から復活するのにふさわしい者とされるために、また、愛する人といつか天の国で再会させていただけるために、そのために今をどう生きるかをまず考えなければならないでしょう。天の国に招かれた後のことは天の国に招かれれば分かるんです。「明日のことを思い患うな」とイエスも言われるように、私たちは今を大切にして生きていきたいものです。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」という御言葉も、今この世において生を受けている私たちが次の世のことばかり考えるのではなく、今この瞬間を懸命に、豊かに生きることをまず考えてほしい、という神様の願いなのです。

もうすぐアドベント（待降節）に入り、クリスマスがやってきます。クリスマスはキリストの誕生日ですけれども、キリストが何のためにこの世に誕生したかというと、それこそこの地上に生きる人間、私たちのためでした。私たちのために、この世の人々のためにイエスは天から肉体を持ってこの世に降りてこられたわけです。私たちがこの世の歩みを終えた次の世のことは、私たちが次の世に行ってみれば分かることです。だからそんな、どれほど考えても答えの出ないことを私たちは今考える必要はない、まず私たちが考えるべきは、私たちが神様に与えられた命をどんな風に燃やして生きていくかなのです。神様は一生懸命生きている私たちの事を決して悪いようにはなさらない方ですから、私たちもまずこの世の歩みを神の国に入らせてもらえるようなものとするために、それぞれの日常の歩みを正して、神様の方をまっすぐ向いて歩んでいきたいものだと思います。